

懇親会挨拶

先ず旭川の関係の皆様のお尽力によって今回のセミナーの開催が可能になりましたことを感謝申し上げます。

この席に御出席くださっております主たる関係の皆様を御紹介申し上げます。

旭川啄木会の石山宗晏会長です。

同会顧問の相川正志先生です。

本日研究発表もして戴きました詩人・歌人である東延江旭川文学資料館副館長です。

同会副会長で、明日、実地研究で三浦綾子記念館を訪れますが、その三浦綾子作品の挿絵でも知られております中西清治画伯です。

そして、今回の全ての実務を仕切ってくださっている石川千賀男事務局長です。

なお、この旭川地区は、勿論北海道に属しておりますが、今回のセミナーが開催可能になっておりますのは、北海道支部の北畠立朴支部長や立花峰夫理事の御高配にもよっておりますことも申し上げておきたいと思っております。

さて、私の本日の御挨拶は四度めになります。

私どもの石川啄木は大変なテクニシャンですから、こんなことを許すのかと気になるところであります。

例えば、『一握の砂』の「煙二」(所謂、漁民を歌った章ですが)では、五四首中二十首(209番の「それとなく / 故郷のことなど語り出て」を入れると二十一首)に「ふるさと」を繰り返しておりますが、勿論、啄木は意識的に「ふるさと」を繰り返している訳であり、彼の卓越した技巧がそのことに少しの不自然さを感じさせないのは、皆さんの良く御承知のところであります。

しかし、私の方にはとてもそんなテクニックはありませんので、四回も登場していることのお詫びを申し上げ、皆さんのお力沿え、御支援によってこのセミナーが成立していることの御礼のみを申し上げ、御挨拶にさせて戴きます。

皆様ありがとうございます。